

# 横浜生まれの

# 福井藩士、

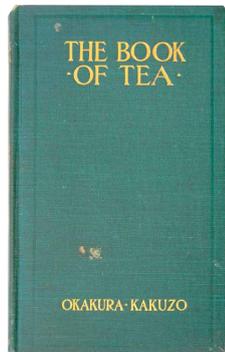
# 岡倉天心



岡倉天心肖像  
(茨城県天心記念五浦美術館蔵)

**近**代日本を代表する美術指導者、思想家であり、英文著作『茶の本』や「アジアはひとつ」という言葉で知られる国際的な文化人でもあった岡倉天心。

天心（本名は覚<sup>かくぞう</sup>三）は、文久2（1862）年、開港間もない横浜



茶の本  
(福井県立美術館蔵)  
東洋の美と芸術の精神を紹介した。

で福井藩の物産を扱う貿易商、岡倉覚右衛門の次男として生まれましたが、福井の港町、三国出身の母このや乳母つね（橋本左内の縁戚にあたる）、店の使用人など福井人に囲まれた環境で育ちました。

元々、岡倉家は福井藩の下級武士の家柄でした。養子であった天心の父、覚右衛門はその才覚を見込まれ、藩の横浜貿易の拠点「石川屋」を任されるまでになります。下士身分から町人身分へと転じますが、生糸などを外国に売って藩財政を潤し、珍しい舶来物を輸入して藩士たちに喜ばれたほか、国内外の重要情報を収

集して江戸藩邸に報告する探索方のような仕事も行っていました。

天心の弟、岡倉由三郎の回想によれば、覚右衛門は子どもの教育には厳格で、コマ廻しなどは絶対にさせず、天心が物心ついた頃には読み書きのほかに、居留地の外国人教師から英語を、また、長延寺（神奈川県横浜市）の住職から漢学を学ばせ、洋の東西に偏らない英才教育を施したとのこと。

10代半ばで英語の意味疎通に不自由しなかったバイリンガルの天心は、東京大学在学中に御雇い外国人教師の米国人アーネスト・フェノロサの通訳として、その美術研究を助け、以後、日本美術に深く関わっていきます。明治期の欧米文化崇拜の風潮のなか、衰退していた伝統美術に新たな息吹きをもたらす、日本美術の救世主となっていたのです。

福井市美山地区では、幼い天心が父覚右衛門に連れられ、父の生家を度々訪れたと伝わっています。天心は、「郷里福井」と手紙に書くなど、父親の故郷を自身の「ふるさと」ともしていました。また、自筆の履歴書には「平民」と記しながらも「旧福井藩士」と併記し、福井藩の武士につらなる出自に誇りを持っていま

した。

天心が産声を上げ、その類いまれなる才能のゆりかごともなった横浜の貿易商館「石川屋」は、横井小楠による構想を由利公正が具現化した殖産興業策の一環として開かれたものです。横浜生まれの福井の先人、岡倉天心は、まさに幕末明治の福井の歴史の中で誕生し、福井人として活躍したといえるのです。

## 関連史料・ゆかりの地

### 福井県立美術館



岡倉天心は東京藝術大学創立の中心に立ち、校長も務めながら、横山大観、菱田春草などの日本画家を育てました。福井県立美術館では、所蔵品展や特別展で適宜天心ゆかりの作品も公開しています。

【住所】福井市文京3丁目16-1  
(JR 福井駅からコミュニティバスまで  
田原・文京方面線「県立美術館前」下車すぐ)

参考資料等

佐々木美帆ほか編『生誕150年・没後100年記念「岡倉天心展」図録』福井県立美術館

執筆・協力

福井県立美術館